印度學佛教學研究第四十二巻第二号　平成六年三月

日蓮『注法華経』の特質

関戸堯海

一、親鸞自筆覚書について

親鸞の自筆覚書が西本願寺の宝物庫から発見され、『教行信証』などの著作のための資料と推定されている。『続高僧伝』『浄土論』から道綽の伝記を抜粋しており、日本の年号に換算した年表を付けている。また日蓮の真蹟の中にも涅槃経『一乗要決』などの諸経論疏から抜き書きした「要文」と呼ばれるものがあり、これもまた著作のための準備と考えられている。従来、末法という時代性を共有していること以外、教義的には全く正反対であることから、あまり注意が払われてこなかった親鸞と日蓮との関係において、著作のための準備作業として諸経論疏から必要な部分を抜き書きするという同様な作業が行なわれている点に着目したい。

このような著作のための準備作業は、現代では書物をコピーして資料を集め、それを分析して執筆にそなえるというような形で行なわれている。必要な部分を筆写し執筆にそなえるという作業は親鸞と日蓮だけに限るものでないことは言うまでもないが、さらなる両者の共通項として親鸞の『観無量寿経註』『阿弥陀経註』と日蓮の『注法華経』の存在が指摘できるのである。

『観無量寿経註』『阿弥陀経註』は、宮崎圓遵師によれば註記は諸書からの引抄ばかりで、親鸞の解釈のようなものはなく、おそらく研学のための備えに類するものであるが、しかしそれによって親鸞の関心の所在を窺うことができ教学との関係についても見過ごすことができないのである。（『親鸞聖人真蹟集成』解説参照）また日蓮の『注法華経』は春日版の法華経の行間・天地・紙背などの余白に諸経論疏からの注記が書き込まれているのであるが、山中喜八師によれば日興の筆と思われる三章を除けば、すべて日蓮の自筆の引用文であり、そこには日蓮の解釈なるものはほとんど示されていない。（『定本注法華経』解説参照）そして注記の目的についても諸説あるが、現在では著作のための準備とみる考え方が定着

しつつある。

さらに、肥前国河上宮旧蔵と思われる平安中期書写の法華経の行間に『法華文句』が朱書きされ、紙背には湛然の『法華文句疏記』が註記されているものの存在も知られている。これらの点を総合して考えてみると、親鸞や日蓮の行なっているような経巻への註記という作業が、当時の比叡山の天台僧の学習の方法であったことがうかがい知れるのである。（高木豊『日本を創った人々8　親鸞』参照）。

かつて、親鸞と日蓮、そして道元とにおいて『涅槃経』が思想的な共通項となっているのではないかという点について考察し、『涅槃経』の「雪山求法」「阿闍世王」「善星比丘（知諸根力）」「転重軽受」などの思想に特に着目すべきとの結論に達したが（拙著『日蓮聖人教学の基礎的研究』、石川力山「鎌倉新仏教における涅槃経受容の諸相」等を参照）、さらにまた、経典に註記をほどこし著作のための準備作業とするという共通項として『観無量寿経註』『阿弥陀経註』と『注法華経』の重要性ついて指摘できると考える。このような点を念頭に置きつつも、もとより親鸞・道元については論じる力を持たないので、日蓮の『注法華経』の特質について論じ、鎌倉新仏教の思想的な特徴の一端について考察したい。

二、日蓮遺文と『注法華経』

『注法華経』が何故に日蓮によって製作されたのかという点について、古来より様々な意見が提示されている。法華経開結十巻にあらゆる経論疏が書き込まれている『注法華経』が携帯に便利であるということから、公場対決に備えて製作されたと見る意見もあった。しかしながら筆蹟鑑定と詳細な引用経論の精査がなされている昨今では（山中喜八編著『定本注法華経』）公場対決の準備という考え方には疑義が提示されており、やはり著作、執筆のための準備作業とみる考え方が妥当であろう。

このため日蓮遺文と『注法華経』の関連を考察することによって、注記の目的が明らかになると考えられるのであり、『注法華経』に注記の経論疏を分析し遺文との関連を探るという研究方法も提示されているが、引用される経論疏があまりに広範なため注記の傾向が分析しつくされていないのが現状である。例えば日蓮が最重要視した天台大師智顗の法華三大部について考えてみた場合でも、日蓮遺文と『注法華経』とに重複する例は数多くみられるが、『注法華経』から日蓮遺文にどのように反映しているかは判然とせず、むしろ日蓮遺文中の天台三大部の引用の特徴が解析されることが俟たれ、それによって逆に『注法華経』の注記の特性が明らかに

なるのではなかろうか。

このような経過の中、筆者は法華経の経文を軸として日蓮遺文と『注法華経』の関連を考察するという方法を用いた。すなわち日蓮遺文中の法華経の引用文と、その前後に引用される（法華経も含めた）諸経論疏の引用文を取り上げ、『注法華経』の同じ法華経文の前後に遺文と同様な引用が集まっている部分を見つけ出すという手法である。この結果として『秀句十勝抄』などの遺文と『注法華経』に顕著な共通項が存在していることを指摘したが（「注法華経と秀句十勝抄の共通項について」『印度学仏教学研究』四十一巻二号所収）、特に日蓮の重要著作である『開目抄』と『観心本尊抄』に『注法華経』との共通項が認められた。（「日蓮注法華経の引用経論について（一）」『印度学仏教学研究』四十一巻一号所収）それは、『注法華経』の「巻一見返し」にまとまって注記されている『涅槃経』如来性品、『法華経』方便品、恵均『無依無得大乗四論玄義』、吉蔵『法華義疏』などの引用文であるが、これらの文は『開目抄』（昭和定本五六九頁）『観心本尊抄』（昭和定本七一一頁）の短い部分にまとまって引用されている上に、方便品の「欲聞具足道」の経文をめぐって、法華経の訳名「薩達磨分陀利迦蘇多攬」についての具足論が展開されている部分であり、引用されている経論疏および「薩」の字に具足の義を見出すという論点において『観心本尊抄』『開目抄』と『注法華経』の注目すべき共通項として指摘できると思われる。

また、さらに『開目抄』『観心本尊抄』を検討してみると、『開目抄』には重複する部分が非常に多く認められるのであるが（別表参照、この点についてはすでに「注法華経と開目抄の関連」『宗教研究』二九五号所収に論じました。）、その一方で『観心本尊抄』には他には共通項が存在していないようであることもわかる。

『開目抄』（昭和定本五四三～五頁）では法華経の二乗作仏について論じ、諸経に二乗の成仏が否定されてきたことを『華厳経』『大集経』『維摩経』などの経文を列記して論証しているが、『注法華経』の譬喩品から授記品にかけて舎利弗・迦葉らの二乗の授記について説かれる法華経文の近辺に『開目抄』と同様の『華厳経』『大集経』『維摩経』などが注記されている。この他にも『開目抄』と『注法華経』の間には顕著な共通項が存在しており、日蓮遺文と『注法華経』の関連を知る上での貴重な事例であることがわかるが、以上のような点によって、『開目抄』『観心本尊抄』が執筆された佐渡期から『秀句十勝抄』執筆の身延期にかけて『注法華経』の注記が遺文に反映されていることが確認できるのである。

三、要文の集成から『注法華経』へ

日蓮遺文と『注法華経』の関連について考察する上で極め

て重要な課題として残るのは、『注法華経』の注記が日蓮の生涯のどの時期になされたかという問題である。それが『立正安国論』執筆の以前などということであれば公場対決を期して『注法華経』が製作されたとする推論も充分可能であろうが、最近では筆蹟鑑定などの面からおおむね身延期を中心に注記が行なわれているとみる考え方が定着しつつあり、最も早い注記でも佐渡期以前にはさかのぼらないことが指摘されている。

そこで問題となるのが叙上のような『開目抄』『観心本尊抄』などの佐渡期の遺文と『注法華経』の関連である。この点については、執行海秀師が『開目抄』と『注法華経』の引用文が重複することを指摘し、現存の『注法華経』より古い別本が存在していたことの可能性について述べていることに象徴される。現存の『注法華経』は全体に身延期のころの筆蹟であるが、一方で『開目抄』などの佐渡期の遺文との明確な関連を知り得ることができるからである。

そこでひるがえって日蓮の遺文全般を見てみると、そこには「要文」と称される『涅槃経』『無量義経』『一乗要決』などからの日蓮の手による抜き書きの存在に注目すべき点が浮び上がってくるのである。これらの要文は日蓮が修学の過程や執筆の準備に筆写したものと考えられているが、いまだ充分な分析が行なわれているとは言い難い。山中喜八師の御教授によれば、「天台肝要文集」などの要文と『注法華経』の関係などが今後検討されるべき課題として残されているのである。

以上のようなことを総合して考えると、日蓮遺文と『注法華経』の関わりにおいて次のような点が指摘できるのではなかろうか。それは、まず日蓮が修学の時代や初期遺文執筆の段階で作成された「要文」があり、それが次第に集成されていく過程において、最終的に『注法華経』という形に整理されていったのではないかという推論である。

すなわち現存している『注法華経』の注記の年代が筆蹟鑑定の結果から身延期のころと推定されているので、この点については異論をはさむ余地は今のところないようであるが、現実には『開目抄』などの佐渡期の遺文とも密接な関係が指摘できるのであって、執行師はこの点に基づき別本の存在を主張するのである。筆者はこれらのことを踏まえて現実に『開目抄』『観心本尊抄』に反映している『注法華経』の原型のようなものが佐渡期のころに存在していたのではないかと考えるのである。またそれは現存の『注法華経』のように整束されたものではなく要文を必要に応じて数篇集めた程度のものかもしれない。

要文が集束されて次第に要文集の形態となり、最終的に『注法華経』として整理されていく途中のそれぞれの段階に

『注法華経』と『開目抄』の関連

	昭和定本	共通する引用	『開目抄』の論旨	『注法華経』の注記個所
1	543-545頁	『華厳経』『大集経』『維摩経』など	法華経の二乗作仏について論じ、諸経に二乗の成仏が否定されてきたことを、経文を列記して論証する。	譬喩品から授記品にかけて舎利弗・迦葉らの授記の部分。
2	558	東春『法華疏義纘』『顕戒論』『法華秀句』など	法華経を布教するものが迫害に遭うと言う点について、天台大師らの解釈を列記する。安楽行品の引用もある。	安楽行品紙背
3	560	『正法華経』	受難の体験について述べ、『正法華経』を含めた諸経の予言と一致することを強調する。	勧持品二十行の偈の部分
4	569-570	『大智度論』など	「薩」について	序品の前
5	585-588	『密厳経』『大雲経』『六波羅蜜経』『涅槃経』など	法師品の已今当の説示に対して、他の経にも同様な部分があることを列記することによって、法華経がすぐれることを証明する。	法師品の已今当の部分
6	591-594	『法華文句記』東春『法華疏義纘』『涅槃経』『泥洹経』など	勧持品の三類の強敵について、諸経論疏を引いて論述する。	勧持品の二十行の偈とその紙背
7	595-597	『泥洹経』『涅槃経』東春『法華疏義纘』など	三類の強敵の内、第三の僭聖増上慢について述べる。	同　右
8	605-609	『摩訶止観』『法華文句』『涅槃経』など	安楽行品を引用し、摂受と折伏について論述する。	安楽行品

おいて、数々の遺文が執筆されていったために、『注法華経』と顕著な関連を示す遺文や関係が希薄な遺文が存在するのではなかろうか。

〈キーワード〉、親鸞、日蓮、『注法華経』、『開目抄』

（立正大学講師）